

文系女子に淫みだらな恋は早すぎる

第一章 小説家のオネガイ

「……では、みなさん。今日も一日元気よく、お客様と本たちのためにがんばりましょう」

ながと書店緑ヶ丘みどりがおかタウン店初の女性店長である、木曾きそ店長が朝礼を締めくくると、私たち従業員はバックヤードから売り場へ向かう。私——榛名はるなあかりも、書店用の白いシャツと黒いパンツにエプロンを身につけ、「よし！」と気合いを入れて朝の作業に取りかかった。

開店前の書店は、一日で一番忙しい。毎日新しく入荷してくる本の山を一時間ほどで陳列し、店内の清掃もしなければいけないからだ。

まだお客様のいないフロアはしんと静かで、本の匂いが立ち込めている。

売り場に続く出入り口には、雑誌やコミック、単行本、文庫本が入った段ボールがたくさん積んであり、私たち従業員はそれらの山を崩していく。

うちの店は、駅に直結している複合ビル『緑ヶ丘タウン』の四階にある。

同じビルの地下には大型スーパーが入り、一階と二階には雑貨店や服飾店が並んでいる。三階は家電量販店と映画館、屋上には小さい遊園地。

建物は築四十年と古いけれど、住宅街が近いので平日、休日ともに買い物客で賑わっている。

ありがたいことにうちの書店も毎日多くの人が来店し、同チェーンの店舗の中では比較的良好に売り上げを維持していた。

「うわー……今日は女性誌の発売日かー。あつ、文庫フェアの段ボールまた来たー」

私と同期入社で、半年前からこの店舗に配属になった、文庫担当の北上君がぼやいている。そんな彼に、コミック担当の女性店員である大井さんが、納品の確認をしながら声をかけた。

「北上君、文庫の品出ししてから、新刊コミックのシュリンクかけ手伝ってね」

シュリンクとは、本が汚れるのを防ぐためにかけられている透明のフィルムのことだ。容赦なく仕事を追加してくる大井さんに、北上君は「はーい」と口を尖らせて答えた。それを見て私も手伝いを申し出る。

「大井さん、私も雑誌を並べ終わったらお手伝いします」

大きな店舗では、自分の担当ジャンルの作業だけを受け持つけれど、うちのような小さい店舗ではみんなで協力して行うのだ。

本の山を手分けて片づけ、私は目の前の段ボールを持ち上げようとした。

「それ重いから無理しないで。私みたいに腰をやられるわよ」

「大丈夫です。実は最近、仕事のために背筋を鍛えてるので」

心配してくれる大井さんに答え、私は文庫の詰まった段ボールを両手でしっかりと抱えた。

「あかりちゃんがこの間、男性向けの筋トレの本買ったの、自分のためだったんだねー。売り場話題になってたんだよー。あかりちゃんに、ついに彼氏が出来たんじゃないかってー」

同じく文庫の段ボールを抱えた北上君が言った。

私が口を開くより先に、大井さんが彼に冷ややかな目を向ける。

「北上君、そういうのセクハラって言うのよ。口を動かすより手を動かしてちょうだい」

そんな二人を横目に、私は文庫売り場へ段ボールを運ぶ。それが終わるとすぐに本の山に戻り、雑誌の梱包を解いて付録を挟み、ビニールの紐で綴じていく。

そうして荷開けと品出しをしたあと、掃除をしてから開店する。開店後も新刊コミックスのシュリンクかけと陳列作業に追われて、午前中はめまぐるしく終わった。

午後からはレジ打ちをしながら、売れた本の補充発注やお客様の注文商品の処理をするつもりだ。その合間をぬって、陳列の直しと品出しもしなければならぬ。

夕方にはレジが混みだすだろうから、それまでに他の細々とした仕事も終わらせていたい。

就職活動中は、書店員の一日がこんなに忙しいと思っていなかった。

小さい頃から本が好きだったので、好きなモノに囲まれて仕事するっていいなあと、漠然とした思いで志望した。入社してから体力勝負の仕事だと知り、自分に続けられるのかとても不安に思ったものだ。

でも、二年目を迎えるいまは身体も慣れてきた。大好きな児童書の担当になったこともあり、や

りがいを持って楽しく働いている。

「あかりちゃんー。手が空いてたら、文庫フェアの本の入れ替え手伝ってくれないー？」

北上君が両手にたくさんの本を抱えながら言った。

「ごめん。まだ児童書コーナーの整理が出来てなくて……」

申し訳なく思いつつ答えると、大井さんがすかさず彼をたしなめる。

「北上君、それぐらいの量ひとりでごなせないとダメよ。来月からコミック担当も兼任になるんだから」

北上君は「そんなの聞いてないですー」と慌てている。

私は彼に「がんばってね」と声をかけてから、担当する児童書コーナーに向かった。

広めに作られたこのコーナーは、児童向け書籍が充実しているだけではない。靴を脱いで遊べるキッズスペースがあり、子供用の低い椅子と机も置かれていて、本の試し読みが出来るようになっている。これは木曾店長の発案で設置されたもので、系列の他店舗にはない。

このキッズスペースはお客様にとっても好評で、平日の夕方や休日は、親子連れや子供たちが集まる。設置前と比べ、児童書の売り上げが三倍に増えたと大井さんが言っていた。

そんな児童書の担当は、責任重大ですごく忙しい。

通常の業務に加え、週末に行っている絵本の読み聞かせの準備をしたり、オススメコーナーのディスプレイを考えたり、やる事がたくさんあるのだ。だけど、お客様の笑顔を見られるととても

嬉しい。

来月はどうなオススメコーナーを作ろうかと、本の陳列を直しながら考える。

……もうすぐ五月で、外で遊ぶのにいい季節になるから、植物や生き物の図鑑を集めてもいいかもしれない。身近な草花や、蝶々の名前が調べられるような……

子供向けの昆虫図鑑などをいくつか手に取って、オススメの本を選んでみる。

「蝶々がお好きなんですか？」

「ひゃっ!？」

考え込んでいたところにいきなり話しかけられて、思わず飛び上がった。しかも。

低いけれどよく通る声だ。振り向くと、背の高い男性が立っていた。

ラフな白いシャツに薄いベージュのトレンチコートに羽織り、黒いパンツを合わせている。すらりとした長い手足に比べると、首の太さが目立つ。前髪が少し長い真つ黒な短髪に、銀縁眼鏡、鼻が高く彫りが深い顔立ち。アーモンド形の大きな目と、きゅっと引きしまった厚めの唇が印象的だ。年齢は二十代後半くらいだろうか。

その整った顔をまじまじと眺めて、うちの店舗のパートさんたちをメロメロにしている『ハカセ』さんと気づいた。

彼の顔をきちんと見たのは初めてだけれど、なるほど、とてもイケメンだ。

女性のお客様からも熱い視線を浴びている彼は、半年ほど前から週に一度は必ず訪れるお客様だ。

平日の昼間によく来店し、大量の本を買ったり、注文したりしてくれる。購入する書籍は専門書が多いので、ひそかに『ハカセ』とあだ名をつけられているのだ。

「すみません、いきなり話しかけてしまって」

彼はそれだけ言うと頭を下げ、すたすたと去っていく。

「え？ あ、あの……」

……もしかして考えてること、また口に出てたのかな？

私はひとりごとを言う癖があつて、人に指摘されてもなかなか直らない。

何か彼が気になるようなことをつぶやいてしまつていたのだろうか。

あつけにとられて『ハカセ』の背中を見つめていると、北上君に肩を叩かれた。

「あかりちゃん、先にお昼休憩どうぞ。何か引き継ぐことあるー？」

担当コーナーの陳列の直しは終わっている。私は「大丈夫です。じゃあ、お先に」と答え、持つていた本を棚に戻してからバックヤードに向かった。

事務所に入ると、木曾店長が話しかけてくる。

「榛名さん。先月のフェアで来ていただいた作家さんから、お手紙届いてるよ」

「……手紙？ 私、作家さんに何か粗相しちゃったんでしょうか!？」

制服のエプロンをはずそうとしていた手を止め、私は木曾店長に駆け寄る。

先月は私の提案で、新人絵本作家さんのフェアとサイン会を行った。

お客様からは好評だったと思うけれど、サイン会のために来ていただいた作家さんへの配慮が足りなかったんだろうか。

もしくは、私の態度がウザかったのかもしれない。

ネガティブな考えが次々浮かんできて、頭が真っ白になる。

「何青い顔してるの。作家さんが怒ったら、出版社を通して本社にクレームが入ってるから。それに、ここでやったサイン会の様子を思い出してごらん？」

木曾店長は赤い眼鏡の縁を押し上げながら、私を励ますように言う。

「とりあえず、休憩中にお手紙読んでみたら？」

にやつと笑って、木曾店長が便せんを手渡してくれる。私は緊張しながらそれを受け取った。

その直後、パートの如月さんがバタバタと事務所に入ってきた。

「榛名さん！ いま、休憩中ですよね？」

いつもは冷静な彼女が、真っ赤な顔でにじり寄ってくる。

私が「はい」と答えると、如月さんは事務所の奥にある更衣室に入り、ロッカーから化粧ポーチを出しながら言う。

「モニターで、『ハカセ』を見張つていてくださいー！」

売り場には何台かの監視カメラが設置されていて、事務所にはその映像を見られるモニターがある。

『ハカセ』を見張るといふのは、お化粧直しけしよをしている間に彼が帰ってしまったのか見ている、ということだろう。彼女はいつも、身なりを整えてから彼の接客に臨むのだ。

私は高いところに設置されたモニターを見上げる。よつつに分かれた映像のひとつに『ハカセ』の姿が映っていた。

如月さんは仕上げにさっと口紅を塗ると、「ありがとうございます！」と言って、またバタバタと事務所を出て行った。

そんな彼女の様子を眺めながら、木曾店長が言う。

「彼女、新婚なのにね。ほんと、『ハカセ』は人気だねえ」

「さっき初めてちゃんとお顔を見ましたけど、俳優さんみたいですよんね」

「イケメンだよねえ。まあ、私は別の意味で好きだけど」

「えっ!? 木曾店長も、『ハカセ』が好きなんですか?」

意外に思った私に、木曾店長がにやりと笑って答える。

「『ハカセ』、客注でたくさん買ってくれるからね」

客注というのは、お客様から受ける注文のことだ。店舗に在庫のない商品を取り寄せ、入荷したら取りに来ていただく。

便利なネット通販があるのに店頭で注文してもらえることは、書店からすればとてもありがたい。「私もそろそろお店に出るわ」

そう言って、休憩を終えたらしい木曾店長は席を立った。

「はい。私は『ハカセ』に興味ないので、休憩がてら店内を見てます」

「そうやって言い切るのも、どうかと思うわよ」

木曾店長は、苦笑しながら事務所を出て行った。

確かに『ハカセ』はイケメンだった。だけど私には、みんなが彼に夢中になる気持ちが分からない。整った顔立ちからは、なんだか冷たい印象を受けてしまった。

——多分、私は誰かに心を奪われて、そして裏切られるのが怖いのだ。

恋をしている友達を見ると、楽しそうで、うらやましいと思う。その一方で、彼女たちが恋のせいで傷ついているのを見ると、途端に怖くなってしまふ。

すごく好きになった相手に、裏切られたらって思うと……怖くて、とても積極的になれない。

悲しい結末を想像して足踏みしているうちに、私は誰とも付き合うことなく、いつの間にか大人になってしまった。

……いいんだ。私には大好きな本と、それに関わる仕事がある。

私はふうっと息を吐いてから、モニターが見える席に座って、木曾店長から受け取った便せんを広げた。

両手で便せんを持ち、ドキドキしながら文字を目で追う。一度読んだだけでは信じられず、三度読んでやっと言葉が心に染み渡った時は、泣きそうになった。

それは、作家さんからの丁寧なお礼のお手紙だった。

……木曾店長の、意地悪。

「作家さんからのお礼なら、そう言ってくればよかったのに……」

私はつぶやき、はああと大きく息を吐く。

でも内容を知らされていたら、こんなに感動しなかったかもしれない。

ふと顔を上げると、監視カメラのモニターが目に入った。パソコンと変わらない大きさの画面に、よつつのカラー映像が映し出されている。

平日のお昼どきという、一番お客様が少ない時間帯の売り場で、『ハカセ』の姿はとも目立っていた。専門書のコーナーで本を読んでいる彼を、つい眺めてしまう。

「あかりちゃんも、『ハカセ』狙いのー？」

うしろからぼんと肩を叩かれ、「きゃっ」と声が出る。振り向くと、北上君が立っていた。

「あかりちゃんさえも落としてしまう『ハカセ』ってー、本当は何者なんだろうねー？」

彼は木曾店長と交代で休憩に入ったらしい。私は心臓をばくばくさせながら「落ちてない！」と返し、モニターから目を離す。

「……みんなが好きになるのはどうしてだろうって思って、見てただけだから」

「いいなー、イケメンは本を買いに来るだけでモテてー」

北上君は私の言い訳が聞こえていないフリをして、隣に並んでモニターを見る。

ふたたびモニターに目を向けると、『ハカセ』は、店の真ん中にある試し読みスペースへ移動していた。

うちの店舗では、一杯目だけ無料のコーヒーか紅茶を飲みながら、席に座って本を読むことが出来る。

そんな試し読みスペースは児童書コーナー同様、木曾店長の提案で設置された。そのぶん本を置く棚が少なくなり経費もかかるので、本部と少しもめたらしい。

でもその結果、売り上げが伸びているからさすがだ。立地のよさだけでなく、木曾店長の手腕でうちの売り上げは維持されていると、大井さんが誇らしげに語っていた。

「あーっ、如月さんが『ハカセ』にコーヒー差し入れに行ったー」

モニターの中で、如月さんが彼に紙コップを手渡している。

『ハカセ』の口が動き、お礼を言われたらしい彼女の顔が、ぱあっと明るくなった。

「……いいなあ、ああいうの」

憧れの人に接している彼女は、とてもかわいく見える。

「あかりちゃんー。二杯目からは有料だから、もう差し入れたらダメだよー」

北上君がじとじとした目でこちらを見ている。

「そういう意味で言っただんじやないよ」

ただ、憧れの人に自分から話しかけたり、コーヒーを差し入れたりする彼女を、ちよつとうらや

ましいと思っただけだ。私はいつも怖がってばかりで、とてもそんなこと出来ない。

不思議そうに首を傾げる北上君から、モニターのほうに視線を戻す。すると、如月さんが嬉しそうな顔で『ハカセ』から離れていくところだった。

「『ハカセ』はああ見えて、すごいケダモノかもしれないよー？ あんまり夢中になったらダメだよー」

北上君はそう言いながら、お昼ご飯を買いに事務所を出て行った。

「……ケダモノ？ 確かに、毛並みのいい猫みたいだけ……」

そんな言葉が口からもれる。頭に浮かんだのは、昔飼っていた猫のユキオだった。

『ハカセ』の髪の毛は艶のある黒で、イメージするなら黒猫なのに……どうして灰色だったあの子が浮かんだんだろう。

私は「変なの」とつぶやき、首を左右に振ってモニターに向き合った。

よつつの映像のどれにも彼の姿がないことに、なぜかほっとする。

お弁当を広げようとした時、モニターに映る売り場の異変が目にとまった。

コミックコーナーに立っている男性が、鞆に次々と商品を入れている。

私は慌てて事務所を出た。

足音を立てないように歩き、コミックコーナーに着く。まわりに従業員やほかのお客様の姿はない。モニターで確認した男性は、出口の方へ立ち去っていくところだった。私は慌てて追いかけて、

彼が店外に出たところで、そっと口を開いた。

「……すみません、こちら落とされませんでしたか？」

逆上させたり逃げられたりしないように、マニュアルに従って、持っていたボールペンを差し出しながら言う。すると、男性はびくつきとしてから、ゆっくりとこちらを振り返った。

目の前の中年男性はスーツ姿で、とても真面目そうな人に見える。

でも、私はこの人が万引きしているのを確かに見たのだ。

「私ではありませんよ」

男性はそう答えて立ち去ろうとする。私は引き止めようと、彼の腕を掴んだ。

「申し訳ありませんが、鞆の中身を事務所で見せていただけませんか？」

男性が顔をこわばらせて、私をじっと見つめる。

書店員になつてすぐ、私は悲しい事実を知って驚いた。書店では、驚くぐらいたくさんの方引きが横行しているのだ。

うちの店舗でも、万引き防止の対策がとられている。夕方の人が増える時間帯には私服警備員さんが見回りをしてくれ、それ以外の時間帯は店員が売り場で目を光らせたり、事務所で休憩を取りながらモニターをチェックしたりしている。

私も万引き現行犯とのやり取りはこれが初めてではなく、何度か経験していた。

事務所に連れていき、そのあとは警備員さんにお任せして……とマニュアルを思い出していると、

男性が口を開いた。

「分かりました。本はお返ししますから」

男性の鞆がどざりと音を立てて床に落ち、シュリンクがかかったコミックが散らばる。うちの店舗では、レジでシュリンクを取っている。だからこれらは未会計の商品だ。

「これでいいでしょう。手を離してください」

無表情で言う中年男性を見て、かあつと頭に血がのぼる。

「……あなたの大切なモノが、いま、あなたがしたのと同じように扱われたらどう思いますか？」緊張で喉がきゅつと狭まる。怖くて仕方がない。

「……私が大切にしている本をないがしろにされた怒りで、言葉が止まらなかった。

「こんな風に、乱暴に扱われてもいいんですか？」

「訳分かんねえこと言ってるねえで、手え離さないと痛い目みるぞ」

気づくと、男性の手にはカッターナイフが握られていた。彼の言葉や雰囲気も、さつきとは打って変わって荒々しい。眼前にカッターナイフを突きつけられ、私は頭が真っ白になった。全身の熱が一瞬で引いていく。

「手え離せよ」

私は指一本動かさず、固まることしか出来ない。

「あんたが悪いんだからな」

男性はちつと舌打ちしたあと、強く腕を振り、掴んでいた私の手をほどいてしまう。それでも動けない私は思わず両目を強く閉じる。

しかし予想していた痛みは襲ってこず、その代わりに「うわっ」という低い叫び声が聞こえた。

私は瞼をゆつくり開けて、目の前の光景に驚く。

『ハカセ』が、中年男性の両腕をねじって彼の身体を床に押さえつけていた。

「榛名さん。彼は私が押さえおきますから、通報をお願いしますか？」

私はがくがくと震え始めた両膝を必死でなだめ、急いで事務所に戻る。そして、彼に言われたとおり警察に電話をしたのだった。

*

「はあー……」

万引き犯と対峙した次の日の朝。私はいつもと変わらず売り場で開店作業をしていた。

「あかりちゃんー。これのため息、十五回目だよー。まだ仕事始まって一時間も経ってないのにー」明るい声に顔を上げると、北上君の笑顔があった。

そのうしろには、雑誌の束を抱えた大井さんがいる。

「落ち込むのも分かるけど、昨日木曾店長が言っていたことは正論だと思うわよ」

昨日万引き犯を逆上させた私は、木曾店長からこつてりとお説教されたのだ。

「大井さん、あかりちゃん被害者なんだから、そんな言い方しなくてもー」

大井さんは北上君の言葉に返事をせず、私が「すみません」と言う前に売り場へ向かっていった。

「俺もみんなも、あかりちゃんを心配してるんだよー」

北上君のフォローに「ありがとう」と返し、私は開店作業に集中した。

『あなたみたいに本を大切に思う人ばかりじゃないって、そろそろ分かりなさい』

木曾店長から最後に言われたその言葉が、一番きつかった。

書店員になって二年、木曾店長が言うとおりの現実を、売り場で何度も見ている。

雑誌の上に座って試し読みする人、付録や特典だけを盗とっていく人。気がつけば本が汚れたり傷ついたりしているのも日常茶飯事にちじょうばんじだ。

万引きのような犯罪までいなくても、本を大切にしない人がいるという現実を、私は受け入れられないままでいる。

そのせいで、昨日はみんなに迷惑をかけてしまった。

「はあぁー……」

開店後も児童書コーナーの棚を整頓せいとんしながら、またため息をつく。

……今度『ハカセ』を見かけたら、彼にも謝らなくちゃ。

そういえばあの時、彼は私のことを『榛名さん』と呼んでいた。どうして私の名前を知っていた

んだらう？

「それはエプロンに付けていらつしやる名札を拝見したからですよ」

「ひゃっ……!?」

いきなり聞こえてきた声に、心臓が飛び跳ねた。振り返ると、『ハカセ』がほほ笑みながら立っている。

「驚かせてすみません。だけど気味の悪い思いをさせてしまったのなら、誤解ごげんを解ときたくて」

……私、また考えていることを口に出してしまっていたのかな。いや、そんなことより『ハカセ』に謝らなくちゃ！

「……昨日は、大変ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした！」

私は腰を折って頭を深く下げる。

「榛名さん、頭を上げてください。謝らなければいけないのは私のほうです」

そう言われてゆつくり顔を上げると、『ハカセ』が頭を下げていた。

「……！ つ、あのっ！ あのっ！」

彼の態度に動揺し、ちゃんとした言葉が出てこない。

「すみませんでした。昨日、榛名さんが万引き犯に近づくのを見ていたのに、助けるのが遅くなつてしまつて……。もっと早く動いていれば、あなたに怖い思いをさせないですみました」

低く、静かでゆつくりとした声に、昨日のことを思い出して涙が出そうになる。

「そんな……謝らないでください。お客様ののおかげで、怪我をせずにすみましたから——っ!?」
彼ががばつと顔を上げたので、私は驚いて口を閉じる。

「私は、あなたが怖い思いをするなんて耐えられません」

私より身長が二十センチ以上は高い『ハカセ』に見下ろされ、目から涙がぼろりとこぼれた。

「……でも、昨日のことは本当に私が悪くて、自業自得でしたから」

私はうつむいて、これ以上涙が出ないように堪えた。

……お店のみんなに心配かけて、助けてくれた『ハカセ』にまで迷惑をかけてしまっている。

「お心遣い、本当にありがとうございます。……もう二度と、お客様にご迷惑をおかけしないよう、十分気をつけます」

昨日は家に帰ってから、大いに反省した。自己嫌悪でいっぱいになりながらも、失敗した分を仕事で取り戻すしかない結論を出した。

……だから、今日はいつもの上にはりきって売り場に立とうと思っていたのに。

少しでも気を抜いたら、膝から崩れてしまいそうだ。

「……そういうことじゃないんだけどな。それに……お客様と呼ばれるのは、嬉しくない」

「え……?」

『ハカセ』のつぶやいた言葉が上手く聞き取れなくて顔を上げると、そっとハンカチを差し出された。

「榛名さん、私は霧島一馬きりしまかずまと言います」

ハンカチを両手で受け取りながら、私は彼の顔をまじまじと見つめる。

「実はあなたに頼みたいことがあるんです。お仕事が終わったら、一階の喫茶店に来てくれませんか? ……待ってますから」

私の耳元で低くささやき、彼は静かに去っていった。

*

ビルの一階にある喫茶店は、私も何度か利用したことがある。比較的どこにもあるチェーン店で、気軽に入れる雰囲気のお店だ。

『ハカセ』……キシシマカズマさんの姿は、すぐに見つかった。なぜなら、店内の女性客の視線が彼に集まっていたからだ。

一番奥にあるその席に近づくと、キシシマさんがこちらに気づいて立ち上がった。

「榛名さん、お疲れ様です。突然お呼び立てして、申し訳ありません」

彼はまた頭を下げてくる。

「ハカ……キシシマさん。そういうのいいですから、座ってください」

心なしか周りの女性たちの視線が痛い。私は彼に座るよう促して、自分もその正面の席に座った。

「私の名前、覚えてくれたんですね」

そう言いながら、彼はくしゃりと笑った。その顔は、いままで見たことのなかったものだ。……といっても、いつもお店でちらっと見かけるくらいで、まじまじと顔を見たのは昨日が初めてだったんだけど。

彼は昨日と同じように、カジュアルな白シャツに黒いパンツというスタイルだ。シンプルな服装が、彼の整った顔立ちをより一層引き立てている。女性たちの視線を集めるのも無理はない。

「お疲れのところ申し訳ありませんが、いまから少しだけお時間をいただけますか？」

思わず見惚れていた私は、その言葉ではっと我に返る。そして、キリシマさんが真面目な表情を浮かべていることに気づいた。

少し間まを置いてから、「はい」と答えたら、彼が優しく目を細める。

席にやってきたウェイターに、キリシマさんはコーヒーを二つ注文する。それと一緒にドーナツをいくつか頼んだ。

「このドーナツはおいしいと評判だそうです」

キリシマさんはそう言うてにやつと笑った。机の上に置いてあったノートパソコンを脇によけ、さらに付け加える。

「せっかくですから、おいしいドーナツをお好きだけ召し上がってください」

まるで子どもがおもちやを自慢するような表情で言うので、私は思わず噴き出してしまう。

……どうだ、と誇らしげな顔が、またユキオに見えてしまった。

慌てて「すみません」と謝り、顔を下に向ける。

「謝らないでください。どうか顔を上げて」

言われたとおりにすると、さつきとは違う穏やかな笑顔があつた。

「私は、あなたの笑っている顔が好きなんです」

『好き』という言葉に驚き、顔がかあつと熱くなる。

……二十三年生きてきて、そんなこと初めて言われた。

「だから謝らないでください。それより、笑顔でいてくださるほうが嬉しいです」

アーモンド形の大きな目に見つめられ、私は思わず目をそらしてしまう。

心臓のあたりがぎゅつと掴まれたように苦しくなった。

「大丈夫ですか？ 顔がとても赤くなってますけど」

「……」

恥ずかしくて何も言えずにいると、ウェイターがコーヒーとドーナツを運んできた。

「い、いただきます」と言つてドーナツに手を伸ばし、口に運ぶ。

しかし慌てたせいか、ゴホゴホとむせてしまう。そんな私に、キリシマさんはコーヒーのカップを差し出してくれた。

「私はさつき食べましたし、横取りしませんから、ゆっくり食べてください」

コーヒーを一口飲んでから、彼の言葉にまた噴き出しそうになる。

「私の発言は、そんなにおかしいでしょうか？」

キリシマさんが怪訝な顔をしてこちらを覗き込んできた。

「あつ、すみませ……」

「おかしいなら、もっと大笑いしてくださいませんか？」

「……すみません、変な意味ではなくて、キリシマさんのギャップが面白くて……」

「ギャップ……とは、どういうことですか？」

キリシマさんが心底不思議そうに首を傾げるので、私は思わず笑い声をもらしてしまふ。

「ふふっ……キリシマさんはお店によく来てくださっているのです、お顔は知っていたんです。でも、こうやってお話しするまで、もっと無口で物静かな方だと思っていたの……で……」

そう話している途中で、失礼なことを言っているのに気づき、「すみません」と頭を下げる。

「……物静かじゃない俺は嫌い？」

先ほどまでとは違ふ、どこか蠱惑的な声でキリシマさんが言った。口調も変わっていたので、私は驚いて言葉を失ってしまう。

けれど次の瞬間には、彼の口調や声のトーンは元に戻っていた。

「大丈夫ですか？」

「はい」と答えながら、心臓が高鳴っているのを感じる。

「すみません。せっかく来ていただいたのにおしゃべりばかりで、まだ用件をお話ししていませんでしたね」

そう言つて、キリシマさんは椅子にかけてあったコートの胸ポケットを探り、黒い革の名刺ケースを取り出した。そこから抜き取つた名刺を差し出され、私は両手で受け取る。

白い名刺には黒い文字で、【入嶋東 Azuma Irishima】と印刷されている。

「入嶋東さんて、あの、ミステリー作家の……」

「そうです。榛名さん、拙作をお読みになつたことはありませんか？」

「……一冊だけ。すみません、ミステリーはあまり読まないんです……」

私は、ミステリーやホラーなどのジャンルは怖くて苦手だ。書店員として知識の幅を広げなければいけないのだけど、なかなか克服出来ないでいる。

「一冊でも読んでいただけただけなら、とても光栄です」

「……そんな。あ、でも、うちの店長は大ファンです。入嶋先生の新刊が出ると、店長がいつも嬉しそうにポップを作っています」

——入嶋東さんはミステリー作家の中で、いま一番人気があるといつても過言ではない。

デビューしてから十年、早いペースで次々と作品を発表しており、そのクオリティは年々上がっている。地理学、民俗学の知識を織り込んだ探偵シリーズは、トリックも秀逸だがそれ以上に登場人物たちの心情が繊細に描かれており、ファンの心を掴んで離さない——

本曾店長が、そう熱く語ってくれたことがある。

「私の作品をいつもいい場所に置いてくださってありがとうございますと、店長さんにお伝えください」

「それは、入嶋先生の力ですよ」

本曾店長の独断ではなく、彼が人気の作家さんだからだ。

新刊が出るたびに、入り口近くの一丁目立つ棚に陳列するよう本部から指示があり、既刊も継続的に売れるので、在庫を切らさないように気を配っている。

「私は、読者さんに恵まれているだけです。本当に、ありがたいことです。私の職業は、読者さんと本屋さんがないと成り立ちませんから」

彼は柔和な笑みを浮かべてそう言った。

「キリシマさんは『ハカセ』じゃなかったんですね」

「博士？」

ついこぼれてしまった余計な言葉に、キリシマさんが不思議そうな顔をする。そして少し考えるような仕草をしたあと、くすつと笑って口を開いた。

「ああ……週に一度、昼間からふらふら現れて、変な本ばかりを大量に購入する不審な男性客のことを、博士だなんて、そんないように推理していただけて光栄です」

何と答えていいか分からず、私はそれ以上口を開けない。

「私の職業については以上です。次は私自身についてお話してもよろしいでしょうか？」

私が「はい」と頷くと、彼はふたたび話し始めた。

「以前から、榛名さんが働くながと書店を利用していただいています。霧島一馬と申します。霧島は戦艦霧島と同じ漢字で、一馬は数字の一に動物の馬と書きます。大学一年の時にデビューし、それから十年作家業で食べています」

私は、うちの常連さんである彼のフルネームを今日初めて知った。

霧島さんの客注の受付はほかの女性店員がやりたがるので、『ハカセ』のあだ名しか知らなかったのだ。

私も彼にならって自己紹介をする。

「……榛名あかりです。大学を出てから、ながと書店緑ヶ丘タウン店で働き始めて二年になります。いまは児童書を担当しています」

「苗字と同じ名前の湖がありますよね？」

「すごい、ご存知なんですね。実は父方の祖父が、その湖の近くに住んでいます」

湖のことを人から言われたのは初めてだったので、私は興奮してしまう。霧島さんは両目を優しく細めて言った。

「すみません、私のせいで、また脱線してしまいましたね。榛名さんとお話ししていると、楽しくて困ります」

驚いた私が「えっ」と声をもらすと、彼は真面目な表情を作って言う。

「私は昨日、あなたにお願いごとをしたくてお店にうかがいました」

……うちの書店で人気のイケメンさんと向かい合って座り、お話ししている。しかも、彼は私にお願いがあると言う。

不思議な状況だなあと思いながら、「お願いって何ですか」と尋ねた。

「私と、お付き合いしてくれませんか？」

私が言葉の意味を理解出来ずに首を傾げると、彼が続ける。

「榛名さん、私の恋人になってください」

言われたことを、頭の中で何度か繰り返した。やっと理解出来た時には叫び声を上げそうになり、慌てて両手で口をふさぐ。

「もちろん、私のことが生理的に受けつけない場合は、遠慮なく断ってください」

霧島さんは、にっこり笑ってそう続けた。

「……そんなことは、思っていないません！」

つい口から出た大きな声に、霧島さんが両目を丸くする。

「では、一度ぐらいデートしてもいいと思ってくださいますか？」

私は彼から視線をそらせず、しかし何も言うことが出来ない。

……お付き合いって、恋人になるって……私と!?

いま、私は告白されているということ？ だけど、彼とまともに会話したのは昨日が初めてだ。

なんでこんなイケメンさんが私なんか……もしかして、何かの罰ゲームとかどつきりとかだらうか。

そんなことを考えていると、霧島さんがくすつと笑った。

「すみません。先走りすぎてしまいましたね」

彼は残っていたコーヒーをぐつと飲みほしてからふたたび話し始める。

「私はこれまでミステリー小説しか書いてきませんでした」

私もコーヒーを一口飲んで気持ち落ち着け、じつと彼の話聞く。

「ですが、以前私の小説を映画化してくださいました監督から熱烈なオファーがあって、映画化を前提にした恋愛小説を書くことになったんです」

私はコーヒーをもう一口飲みながら、さすが人気作家さんだなあと思う。

「書店に勤める二十三歳の女の子が主人公なんですけど、彼女のがうまく描けずに悩んでいます。担当編集者に相談したところ、実際にそういった女の子と恋愛してはどうかと提案されました。それを聞いた時、相手はあなたじゃないかと思っただけです」

私は彼の話を必死に頭の中で整理する。

……つまり、小説の主人公と似た立場の私に……モデルになってほしいってこと？ でも霧島さんくらい格好よければ、私なんかより、もっとふさわしい子をいくらでも選べるだろう。

「あの、参考にするなら、うちのお店にいるほかの女の子のほうが……」

「俺はあなたがいい。……俺と恋人関係になるのは嫌？」

霧島さんがまた声のトーンを変えて言った。ドクンと胸が鳴る。

けれどその胸に、恐怖がじわじわと広がっていく。

私は少し考えてから、ゆっくりと口を開いた。

「……霧島さんの恋人になるのは、嫌じゃないですけど……怖いです」

彼が両目を大きく見開いた。その顔を見た私は、さあっと体温が下がるのを感じる。

「あの、すみま……」

「嫌じゃないんですね？」

霧島さんは私の言葉にかぶせるようにして続ける。

「ではこうしましょう。次のお休みに私とデートして、大丈夫だと思ったら関係を結んでくれませんか？」

「……関係？」

「はい。仮の恋人関係です」

聞き慣れない言葉ばかりで理解が追いつかず、私は呆気にとられてしまう。

「すみません。自分勝手に話しすぎましたね」

霧島さんは水を一口飲み、少し勢いを弱めて言った。

「試しにデートするのも嫌でしたら、はつきり言ってください。ですが、少しでも悩んでくださるなら、あなたに私のことを知ってもらうための機会をいただきたいんです」

彼はとても真剣な様子で、その真摯なまなざしに見つめられると、不思議なくらいに心が揺さぶられた。

恋愛小説の参考にするため、彼と偽の恋人関係になる。それを怖いと思う気持ちは確かにあるけれど、同時に、胸が高鳴っていることにも気づいていた。

何より彼には、危ないところを救ってもらった恩がある。

……ずっと怖がってばかりで、恋愛なんてとても出来なかったけれど、一度デートするくらいなら私にも出来るかもしれない。

それで彼の役に立てるなら……

私は両手を膝の上でぎゅっと握りしめ、霧島さんの顔をまっすぐに見た。

「……昨日、助けていただいたので……デートくらいなら……しても、いいですよ……」

すごく高飛車な言い方になってしまい、かあっと顔が熱くなる。

「ありがとうございます。すごく、嬉しいです」

そうやって霧島さんがくしゃりと笑うので、もっと顔が熱くなってしまった。

第二章 偽物のカンケイ

「あかり……それって、騙だまされてるんじゃないの？」

五歳年上の姉が、私を指差してずばつと言う。

「……じゃあ、明日は行かなくていい？」

「いや、それはダメ。……うーん、違うなあ……次はこれ着てみて」

そう言っつて、何回目か分からない着替えを強要する姉に、私は大きく息を吐いた。

デートが明日に迫ってしまった今日、私は自分のアパートからそれほど遠くない実家に寄った。家族みんなで夕食を食べた後、相談したいことがあると言っつて姉の部屋を訪ねただけ……すでにそのことを後悔し始めている。

……デートに着ていく服を借りるだけのつもりだったのになあ。

姉には、三日前に霧島さんとかわした会話の内容を全て白状させられた。その結果、いつになく気合いを入れた姉に、着せ替え人形にされる羽目になったのだ。

服を床いっぱいに広げている様子に興味を引かれたのか、五歳の姪めいが部屋を覗き込んできた。

「あかりちゃん、ファッションショーやってるの？」

「こーらー、お母さんとあかりは大事なお話してるの。あんたはじじとばばのとこ行っついで」
姉にそう言われて、姪めいは頬を膨ふくらませながらも部屋のドアを閉める。

……うう、私もお母さんとお父さんのところに逃げたい。

「あかり、さっさとそれ着てこつち向いて？」

姉は昔からおしゃれで、洋服にこだわりを持っていた。

五歳年上で自分を持つている彼女に、私は小さい頃から絶対に逆さからえなかった。

「うん。その服なら、あかりの初デートを大成功させてくれるよ」

私が着ているのは、つるりとした淡いベージュの生地なまに、白い花がたくさんプリントされた膝丈のサックワンピース。八分の袖口はフリルはちぶになつているけれど、かわいすぎずきちんとしている。

「……お姉ちゃん、こんなワンピース持つてたんだね」

姉はスリムで、シンプルでさっぱりとした格好がよく似合う。彼女もそういつた服装を好んでいるのだが、このワンピースはいつも姉が着ているものとずいぶん違つていた。

「私がそんな女子アナみたいな服、選ぶわけないでしょ。元旦那の趣味だから仕方なく買ったの」

姉は三年前に離婚し、姪めいを連れて実家に帰つてきた。

私は姉も姪めいも好きだから、一緒に暮らしたかったんだけど……

『いま家を出ないと、あかりは一生親離れできない！』

私が大学を卒業する時、姉が私と両親にそう断言した。その結果、私は実家から二駅離れたア

パートでひとり暮らしをしている。

……お姉ちゃんが旦那さんの話したの、久しぶりだな。

そう思ったけれど、私は口を開かず、鏡に映る自分の姿を眺める。

さらに追加でオフホワイトのロングカーディガン、ページューのショートブーツ、小さな白いショルダーバッグを渡される。

完璧なコーディネートで、さすがだなと感心した。

「髪の毛は下ろして、ちゃんと内巻きにブローしなさいよ。コテが使えるなら巻いたほうがいいんだけど……」

無理だよ、と言いたげに姉が私の髪を見た。

私の髪は染めてないけれどこげ茶色で、肩下まで伸ばしている。髪を伸ばしていれば少しぐらい寝癖がついていてもごまかせるからだ。いつもひとつにくくっているだけなので、姉が言うようなヘアアレンジは出来そうにない。

「あと、お化粧は普段どおりでいいけど、口紅はちゃんと引きなさいよ」

そう言っただけで、大きなドレッサーから口紅を取り出して手渡してくれる。

「服も小物も、その口紅も全部あげるから、ちゃんと報告すること」

「いいの？ ……って、報告？ 何を？」

「胡散臭い自称小説家とのデートの結果に決まってるでしょ？ ってかそのイケメンは本当に有名

な小説家なの？」

私は携帯を取り出し、先日ネットで見つけた画像を見せる。

「これ、霧島さんが十八歳でミステリーの大会を受賞した時のやつだって」

姉を見せている写真には、十年前の霧島さんが写っている。長身ですらりとしているのはいまと変わらないけれど、顔つきが若く、眼鏡もかけていない。

入嶋東はこの賞の授賞式以降、メディアに一切顔を出していないらしい。そのため、当時の雑誌に載っていたという、あまり鮮明ではない白黒写真一枚しか見つからなかった。

それでも整った顔立ちには十分に伝わるなと思った。

「……ちよっと！ あんたの言うとおりにイケメンじゃない！ ってか、有名な小説家って、あの入嶋東のことだったの!? 入嶋東の小説ってこの間もドラマ化されてたし、去年は映画化されて大ヒットしてたじゃない！」

姉が興奮して早口でまくし立てる。

「……お姉ちゃん、お願い。私と霧島さんのことは誰にも言わないで」

お客様とプライベートで出かけるのは、たとえ頼まれたにしても、あまりいいことではないだろう。

それに、あの入嶋東さんが私なんかと出かけるなんて、彼にとつて外間が悪いに違いない。

「分かった。正直、お母さんには言いたいところだけど、内緒にしておいてあげる。もちろん、お

父さんにも娘にも言わない」

姉が真面目な顔で言ってから、ふっと表情を緩める。

「だから安心して、イケメン小説家との生まれて初めてのデートを楽しんできな」

「そんな言い方されたら、よけい緊張してきた……」

「ははっ。デート前日の緊張とか、高校生の時くらいだよ。ほんとうらやましいなあ」

私はうらやましいの意味が分からず、楽しそうに笑う姉の顔をうらめしく見つめた。

*

昨日姉に選んでもらった服を着て、霧島さんとの待ち合わせ場所にやってきた。約束の正午までは、あと十五分もある。

今日は郊外にある植物園に行く予定だ。霧島さんが言うには、とても見ごたえのある温室が有名ならしい。

いま私がいるのは、植物園の最寄り駅。平日のお昼前ということもあり、駅前に人はあまりいない。

初めて訪れる駅の周辺を新鮮な気持ちで眺めていると、こちらに向かって歩いてくる人影に気づいた。

「すみません。待たせてしまいましたか？」

正面に立った霧島さんの姿を見て、私は思わず固まってしまった。

彼は、Vネックの白いシャツに紺色のデニムジャケットを羽織っていた。細身の白いパンツに、ブルーのローファーを履いている。眼鏡はかけておらず、髪の毛はワックスで整えられていた。

売り場で見かける彼とは、別人のように見える。

……まるで俳優さんか、モデルさんみたいだ。

「榛名さん？ どうかされましたか？」

彼に見惚れていた私は、その言葉を聞いて我に返った。

「……イケメンパワー炸裂って感じですよ」

私が思ったままのことを口にすると、霧島さんが目を丸くする。

「なんだか、すごく強そうですね」

そう言っただけで霧島さんはほほ笑んだ。

彼の笑顔を見て、私はほっとする。

……よかった。中身はこの前と同じだ。

「さて、行きましようか。植物園はここからバスで十分ほどです」

そう言っただけで霧島さんは長い腕を伸ばし、私の右手を取った。

私はびっくりして、心臓が止まりそうになる。

「あのっ、霧島さん。手っ……」

彼の大きな手に私の右手が包まれる。どうしていいか分からず慌てる私に、彼が笑顔で言った。

「デートでは手をつなぐのが基本でしょう」

「そんな基本、知りませんっ」

恥ずかしくて、顔がどんどん熱くなる。

「嫌なら手を離します。でも、それでは小説の参考にならないので、出来ればこうしていただきたいのですが……」

霧島さんが真剣な目で、じっと私を見つめている。

今日は助けてもらったお礼に、霧島さんに協力するって決めたんだから！

私は高鳴る胸を左手で押さえながら、決意を固める。

霧島さんが顔を覗き込んできたので、私は震える声で小さく「分かりました」と答えた。

「よかったです」

彼はそう言っただけで私の隣に並び、バス停に向かって歩き出した。

つないでいる手から、緊張が伝わりそうに恥ずかしい。何か話をしようにも、混乱していて言葉が出てこない。そんな私の気も知らず、霧島さんが笑いかけてくる。

「おしゃれしてくださいさっさんです。ありがとうございます。とても似合っています」

ごく自然に褒め言葉をささやかれ、さらに鼓動が激しくなる。

その音をごまかすように私は口を開いた。

「今日のことを姉に話したら、この格好をしるって言われて……」

「お姉様は、あなたのことをよく分かってるんです」

「えっ」と言っただけで、私は隣を見上げる。

「とてもかわいくて、榛名さんによく似合っています」

私は熱く火照った顔を下に向ける。バスに乗り、植物園に着くまで、恥ずかしくて彼のほうを見られなかった。

「まずはお昼ご飯を食べてから、園内を見て回りましょうか」

バスを降り、入場ゲートをくぐったところでそう言われる。

手をつなぐのに少し慣れてきた私は、彼の横顔をちらりとうかがいながら「はい」と答えた。

高い鼻だなあと思っただけで見つめていると、彼が急にこちらを向いたので、私は慌てて正面を向く。

「今日は天気がいいので、屋外で食べたいですね」

いま歩いてる道はレンガが敷き詰められていて、両脇に並んだ花壇には、色とりどりの花が咲いていて綺麗だ。道の左右には短く刈り込まれた青い芝生が広がっている。

降り注ぐ陽光に照らされて、園内の景色は白く輝いて見える。

「春の終わりの光は、世界を全て包んでしまいそうな優しさを感じますよね」

隣から聞こえてきた言葉は詩的で、あまり耳になじまない。

……でも、霧島さんが言うのと自然だ。
思わずふふっと、小さく笑ってしまう。

「もしかして私、何か変なことを言いましたか？」

霧島さんが怪訝な顔をしている。

「変じゃないです。霧島さんの目から見る景色は、私のような凡人が見るものより、とても綺麗なんだろうなって思いました」

「どんな景色よりも、あなたのほうが美しいですよ」

にやりと笑って霧島さんが言う。また褒め言葉を言われてしまい、頬が熱くなって目をそらした。……恋人同士のふりって、すごく恥ずかしい。

そのあとは、ふたりで黙って歩みを進める。背の高い木が並ぶ林に入り、そこを抜けると、また違う景色が広がった。太陽の光を受けてきらきら輝く池がある。

霧島さんは、池の周りがあるベンチのひとつに私を誘った。

「榛名さんは何が食べたいですか？ 買ってくるので、座って待っていてください」

「私も行きます」

そう言ったのに、霧島さんはひとりで屋台のほうに向かった。

私は急に気が緩んでベンチに座り込む。はあっと大きく息を吐いて、やっと解放された右手を見る。

……恥ずかしいけど、思っていたより怖くない。

実は今日のデートに備えて、姉から話を聞いたり、マンガや小説を読んだりして予習していた。

小説の参考にするのなら、出来るだけ一般的な恋人同士のようにしたほうがいだろうと思っ
てのことだった。でも調べれば調べるほど、私にはハードルが高すぎて……初めてのデートが怖く
なってしまった。

ところが、いざ当日を迎えてみると、恥ずかしくて緊張することはあるものの、怖くて身がすく
むことはない。

……これはきつと、霧島さんのお陰だね。

「……霧島さんで、よかったな」

「私で、何がよかったんですか？」

口からもれていた言葉を拾われ、驚いて両肩が大きく跳ねる。振り返ると、両手にビニール袋を
提げた霧島さんが立っていた。

「とりあえず私のオススメを買ってきたんですが、気に入らなかつたり、足りなかつたりしたら
言ってください」

霧島さんはそう言ってベンチの端に座り、買ってきた食べ物をひとつずつ置いた。

私と霧島さんの間に、焼きそば、たこ焼き、アメリカンドッグ、フランクフルトが並ぶ。

最後に、お茶のペットボトルを手渡された。

「熱いうちに食べましょう。……いただきます」

霧島さんは手を合わせてから、フランクフルトを頬張る。

これがマンガなら『もぐもぐ』と効果音がついていそうな食べ方だ。その嬉しそうな表情を見て自分の頬が緩むのが分かった。

……こんなことを思ったら失礼かもしれないけれど……かわいらしいな。

私はお茶を一口飲み、膝の上にハンカチを広げてから、アメリカンドッグを手にする。

一口かじると、甘さとしょっぱさが同時に口に広がった。どこか懐かしいような味で、おいしい。

「子供の頃、父に連れてきてもらって、ここでこうしてお昼を食べました」

霧島さんが静かに語り始めた。彼は池を見つめながらフランクフルトを口に運んでいる。

「父は忙しい人だったので、たまに遊びに連れていってもらうのが、とても嬉しかったです。母親はあまりいい顔をしなかったのですが、屋台のジャンクフードを食べるのも楽しみのひとつでした」

落ち着いた低い声を聞きながら、私も目の前の池を見つめた。

緑の匂いが強く香り、水面はきらきら光って揺れている。

「たこ焼きもいかがですか？ おいしいですよ」

いつの間にかフランクフルトを食べきっていた霧島さんは、たこ焼きを手に持っていた。

つまようじに刺さったたこ焼きが、こちらに差し出されている。

私の手には、まだアメリカンドッグが半分残っている。けれど、霧島さんは構わずたこ焼きを私の口に放り込んできた。

「おいしいですか」と聞かれ、私は口をもごもごさせながら頷く。

霧島さんは目を細めて、同じつまようじでたこ焼きを頬張った。

それを見て、私の顔がまた熱くなる。

「……霧島さんて……気にしない人なんですね」

「ごんとたこ焼きを呑み込んだあと、霧島さんが「何をですか」と聞いてくる。

「……その……間接キス……」

私は小さな声で言ってから、そんなことを気にしている自分が恥ずかしくなって下を向く。

男性の見た目に厳しい姉が、イケメンだと言って興奮したぐらいだ。きつと彼はモテるに違いない。間接キスくらい、意識するほどのことでもないだろう。

ちらりと見上げれば、彼は不思議そうにこちらをうかがっている。私は慌てて弁明した。

「すみません。訳分かんないこと言っちゃって。私、よくボケたことを言ってしまうんですっ。

姉にも、そのことで子供の頃から叱られ続けて……」

えへへと笑ってごまかすと、霧島さんはふっと表情を緩めた。

「お仕事はとてもしっかりされていて、そんな風には見えません」

「売り場に立ち始めた頃は、店長にもよく叱られました。霧島さんがうちの書店に通われるよう

になったのは、ここ半年くらいのことでしょうか？ だからご存知ないだけですよ」

「私のことを、そんな頃から知っていたんですか」

彼が目を丸くした。

「売り場の女の子たちが、霧島さんのことを格好いいって、いつも噂うわさしてますから」

それを聞いて、霧島さんが急に真面目な顔になる。

「榛名さんは、私のことをどう思っていましたか？」

真剣な目で見つめられて、私は少し考えてから答えた。

「……みんなが言うとおり、イケメンさんだなあと思っていました。難しい本をたくさん買われるので、頭のいい人なのかなあ、とも……」

お客様に対する印象を、こんな風に語っていいんだろうか。

霧島さんは何も言わない。

やっぱり失礼だったかもと思って謝ろうとした時、彼が口を開いた。

「この間、私のイメージと言動にギャップがあると行ってましたね。あの時は聞きそびれましたが、実際の私を知ってがっかりしましたか？」

「がっかりなんてしてませんよ！」

つい大きな声が出てしまった。慌てて声を小さくする。

「……だって、霧島さんは私を助けてくれましたから」

確かに、売り場で遠くから眺めていた時は、霧島さんがこんなにおしゃべりで表情豊かな人だとは思わなかった。

あまり物事に動じない……もつと言えば、周りに興味がなさそうな冷たい印象だった。

しかし実際の彼は冷たいどころか、刃物を持った相手から身を挺たくして私を助けてくれたのだ。

そのあとも、落ち込んでいた私に優しい言葉をかけてくれるような、温かい人だった。

「今日直接会って、もう一度お礼を言いたかったんです。霧島さん、助けてくださってありがとうございます
ございました」

そう言って、ぺこりと頭を下げる。顔を上げると、霧島さんは目を細めて私を見つめていた。

その表情を見て、また懐かしい顔が思い出される。

「……ユキオみたい」

頭に浮かんだことが、うっかり口からもれてしまう。

それを聞いた途端、霧島さんは急に顔色を変えて私の両肩を掴んできた。

「ユキオというのは、榛名さんがお付き合っている男性のことですか!」

あまりの勢いに、私は思わず身を引く。

「ち、違います!」

なぜか必死な様子の霧島さんに、正直に答える。

「ユキオは、二年前まで実家にいた……オス猫の名前です……」

私の言葉にほっとした様子の彼が、両手を離してうつむいた。

「……取り乱して、申し訳ありませんでした。でも、よかったです」
何がよかったんだろうと思っていると、霧島さんが言葉を続ける。

「ユキオは、どんな猫だったんですか？」

そう聞かれて、ぎゅつと喉の奥が狭くなる。

「……私が小学校四年生の時、誕生日プレゼントにもらった、ロシアンブルーの子猫でした。最初は両手で包めるほど小さくて歩き方もおぼつかなかったのに、あつという間に凛々しい大人の猫になりました」

「ロシアンブルーは、犬のように飼い主に忠実な性格だと聞いたことがあります。大人しくてほとんど鳴かないことから、『ボイスレスキャット』とも呼ばれているんですね」

私は霧島さんが猫に詳しいことに驚いた。

「はい」と肯定して、ユキオについて説明する。

「ユキオも大人しくて、優しく、私が落ち込んでいる時は、そつとそばに寄り添ってくれました。トイレにもついて来るくらい私にべったりだったんですが、本当は私のほうが甘えていたのかもしれない……ずつと、一緒にいたかったです」

「榛名さんにそう言ってもらえて、ユキオは幸せですね」

霧島さんは優しい笑みを見せてくれる。

ユキオのことを思い出したら、じわりと両目に涙が浮かんできた。

「こんなことを言ったら失礼かもしれませんが、実は霧島さんがユキオに似ているように感じる時があつて……」

「では、私をユキオだと思ってください」

霧島さんはにやつと笑ってそう言った。

私は驚いて言葉を失う。

「どうぞ。存分に甘えてくれていいですよ」

「さあ」と、霧島さんは両手を広げる。

ちよつとおどけた表情に、私は噴き出してしまった。

くすくす笑いながら、彼のほうに腕を伸ばした。

「こうして撫でてもらうのが、ユキオは大好きでした」

自分より少し高い位置にある彼の頭を、片手でそつと撫でる。

霧島さんは両目を大きく見開いていた。そんな彼を見て、私は自分の失態に気づく。

「……っ、す、すみません！」

慌てて手を引っこめようとする。するとその手が、大きな手に掴まれた。

正面からまっすぐ見つめられる。

「榛名さん、好きです」

私は頭の中で彼の言葉を繰り返して、その意味を理解しようとした。

「……えっと……撫でてもらうのが、ですか？」

「違う。俺は、君が好きだ」

そう言った霧島さんの表情は、初めて見るものだった。

……ユキオに似てると思っただけで、全然違う……大人の男の人の顔だ。

どくと心臓が大きく鳴る。

彼から目が離せなくなつて……ふと、握られている手に痛みを感じた。

「……霧島さん、手、痛いです」

小さい声で告げると、ぱつと手を離され、霧島さんが深く頭を下げた。

「すみません」

いつもと変わらない声と口調の彼に、私はほつと息を吐く。

「大丈夫ですから、頭を上げてください」

霧島さんがゆっくりと顔を上げる。

その表情は、どこか落ち込んでいるようにも見えた。

……さっきの言葉はなんだったんだろう。あれも小説の参考にするためなのかな？

よく分からないけれど、もう一度あんな雰囲気になったら、心臓がいくつあつても足りない気がした。

「ぎ、霧島さん。残りのお昼ご飯を食べて、温室に行きませんか？」

私は空気を変えようと、思い切つて明るい声で言った。

彼は、「はい」と答えてほほ笑む。

それから私たちはお昼ご飯を片づけて、池のほとりにある温室へと向かった。

ガラスで出来た、大きな鳥かごみたいな形の温室に入ると、むわつとした熱気に包まれる。

「ここには熱帯雨林に生息する珍しい植物がたくさんあるため、湿度が高いんです。足元が濡れていて滑るかもしれないので、手を……」

霧島さんが私の手を取つた。私は反射的に身をこわばらせてしまう。

「私と手をつなぐのは、やっぱり嫌ですか？」

彼が顔を覗き込んでくる。私はそんな彼から目をそらした。

「……嫌じゃないです……けど……」

恥ずかしいです、と小さく言うと、つないでいる手にぎゅっと力が込められた。

私がそれ以上何か言う前に、霧島さんがゆっくりと歩き出す。

彼と並んで歩きながら、あたりを見回した。

霧島さんが説明してくれたとおり、見たことのない植物たちがうっそうと茂っていた。

順路に沿って進んでいくと、黒くて大きな蝶が目の前をふわりと舞う。

「もうすぐ、蝶の住処ですよ」

霧島さんがそう説明してくれた。私は美しい蝶ちように目を奪われて、足元への注意がおろそかになる。慣れないヒールを履いた足が地面を滑すべった。

「……あっ！」

転ぶと思つた瞬間、ぐつと手を引かれ、遅たぐまい腕に包まれる。

「大丈夫ですか？ 足をひねってはいませんか？」

私は彼の顔をそつと見上げた。

「……大丈夫です」

「よかった」と言つて、霧島さんは目を細める。

それを見た瞬間、どくんと胸が大きく鳴った。

彼の長い両腕に抱かれ、身体がびったり密着している。その状況に気づき、急に恥はづかしくなってきた。

私はうつむきながら「すみません」と言つて、彼から身体を離す。

「謝らなくていいですよ。頼つてもらえて、すごく嬉しいです」

霧島さんの言葉に、かああと顔が熱くなる。

彼の顔を見上げると、私に向かって静かにほほ笑んでいて、またどくんと心臓が鳴った。

「榛名さん？ 顔が赤いですけど、大丈夫ですか？」

「だつ……大丈夫です。温室だから、少し暑くて……」

私はますます恥はづかしくなつて、火照ほつた顔を見られないようにうつむいた。すると、頬にやわらかいものが触れる。

「……っ!？」

驚いて見上げたら、霧島さんの顔が離れていく。

「な、なにを……」

「デート中、彼女がかわいくて我慢出来ない時は、頬にキスするのが基本です」

彼はそう言つて、くしゃりと笑つた。その顔は少し意地悪く見える。

霧島さんの唇が触れた頬に手を当てたまま、言葉を発することが出来ない。

「嫌でしたか？」

恥はづかしくて顔を背そむけたいのに、彼が覗き込んでくる。

「……人目のあるところでこんなことして、大丈夫なんですか？ 霧島さんは、人気の作家さんなの……」

私は答えをごまかすように質問する。

すると彼は両目を大きく見開いたあと、笑顔で言つた。

「私のことを心配してくれてるんですね。ありがとうございます。でもそんなことよりも、榛名さんのデートのほうが大切です」

「……そんな……私とのデートなんて、大したことじゃないでしょう」

「私にとつては、大したことですよ」
真面目な顔で言われて、また胸がドキドキしてしまった。

*

温室を出た私たちは、この植物園の名物だというハイビスカスソフトクリームを食べた。そのあとはスワンボートに乗ったり、園内をぐるっと散歩したりしてから、帰路についた。

駅に向かうバスの中で、私は今日一日を振り返って、とても幸せな気分びたに浸ひたっている。

デートに誘われた時は、正直、腰が引けた。だけど、危ないところを救ってくれた霧島さんの役に立てるならと、緊張しながらも勇気を出してやってきたのだ。

そしていざデートしてみると、怖がっていたのが嘘のように楽しかった。彼が気を遣ってくれたからだろう。

胸がドキドキすぎて困る場面も多かったけれど、霧島さんのことを新しく知るたびに心が弾はんだ。いままで知らなかった彼のいろんな表情が見られたのも、なんだか嬉しかった。

……まだ、帰りたくないなあ。

そんな風に思ってしまうほど、彼と過ごす時間を心地よく感じている。

「でしたら、このあと夕飯も一緒に食べませんか？」

その声に顔を上げると、霧島さんは嬉しそうに笑ってこつちを見ていた。

……わっ、私、また考えてることが口に出ちゃったの!?

「榛名さんが勤めている書店の近くに、おいしいイタリアンがあるんです。そこはどうでしょう？」

私が「……はい」と返すと、彼はまた嬉しそうに笑った。

バスが駅前に到着すると、そこから電車で書店のある駅に向かう。

彼に案内されたレストランは、駅から歩いて五分ほどの、三階建てのビルの中にあつた。

「ここは私の家から近いので、何度か来たことがあるんです。ピザは好きですか？」

私が「好きです」と答えると、彼はにこつと笑ってお店の扉を開けてくれた。

「いらつしやいませ」という店員さんの声と、何かを焼くいい匂いに迎えられる。

店内は照明が薄暗く、上品だけれどかしまつてはいない雰囲気だ。お客さんたちが楽しそうに

食事をしている。

元気な女の子の店員さんが、笑顔で一番奥のテーブルに案内してくれた。

「飲み物はありますか？ お酒は呑めますか？」

向かいに座つた霧島さんが、ドリンクメニューを見せてくれる。

私は「呑めます」と言いかけた言葉を呑み込み、「少しだけ」と答えた。

姉から、初めてデートする相手にはそう言えと教わつたからだ。

「ここは自家製のサングリアがおいしいんですよ」

「自家製ですか？ おいしそうですね。それにします！」

思わず弾んだ声で言うと、霧島さんが注文してくれる。

そのあとも、彼はばらばらとメニューをめくり続けた。

「このビザは生地が薄くてぱりっとしたタイプなんです。特にプロシユートとバジルのビザがおいしいんですけど、それでいいですか？ あとオススメなのは……」

楽しそうにすすめてくれる彼に、私はつい頬が緩んでしまう。

……本当にユキオみたい。見た目はしゅつとしたイケメンさんなのに、中身は……

「中身はしゅつとしてなくて、すみません」

「ごっ……ごめんなさい！ そういうことじゃなくて……えっと……」

また思っていることを口に出してしまっていたと気づき、弁解しようとしたところに、ドリンクが運ばれてきた。

「乾杯しましょう」

霧島さんは特に気にした様子もなく、サングリアのグラスを掲げた。

私も綺麗なぶどう色の液体で満たされたグラスを手にして、かちんと合わせる。

一口呑むと、いろんな果実のいい香りが、ふわりと広がった。

「……あ、おいしい」

素直な感想が口からもれる。

「でしよう？ ワインではなくぶどうジュースで作った、ノンアルコールのものもあるんですが、そちらもおいしいですよ」

「サングリアって、ジュースでも作れるんですか？」

私は驚いて聞き返す。サングリアは普通、赤ワインか白ワインに果物を入れて作る飲み物だ。

「そのようですね。この店では、アルコールに弱い人やお子さんでも楽しめるようにと、用意しているらしいですよ」

「へえ……今度真似して作ってみよう」

「榛名さんは、お酒が好きではないんですか？」

「いえ、実家にいる姪が、大人だけでお酒を呑むると拗ねるから、出してあげたら喜ぶかなって思っただけです」

私は姪の顔を思い浮かべながら言った。霧島さんは「なるほど」と笑顔で頷いてくれる。

……おいしいお酒を呑みながら霧島さんと話す時間は心地よくて、いろんなことを話したくなる。昼間の緊張は、すっかりどこかへ行ってしまうていた。

「姪っさんは、おいくつですか？」

「五歳です。最近どんどんませてきて、口も達者になって……いつも言い負かされています」

「例えば、どんなことですか？」

「なんで大人なのに彼氏がいないのか、とか……」

言いながら、しゃべりすぎてしまったことに気がついた。

わざわざ自分で暴露しちゃうなんてっ。

しかし霧島さんは、なぜか嬉しそうにほほ笑んでいる。

「デートに誘っておいで、いまさらですが……榛名さんは、いま彼氏がいないんですか？」

「……いません」

いまだけじゃなくて、二十三年間ずっとだけど。

姪っ子は保育園で彼氏が出来て、さらにほかの男の子からも告白されたらしい。

かたや私は二十三年間彼氏がいないばかりか、告白されたこともない。

姉や友達には、もっと積極的になれと言われ続けている。

みんなの言うことは分かるんだけど、でも……

「……私、恋愛が怖いんです」

ぼろりと本音がこぼれる。

「恋愛で怖い目にあつたことがあるんですか？」

そう聞かれたものの、どう答えていいか分からず、口をつぐんでしまう。

「すみません、不躰な質問でしたね」

「……謝らないでください。大したことではないんです」

私は一度口を閉じ、覚悟を決めてからふたたび開く。

「私……恋愛経験がなくて……」

「じゃあ、どうして恋愛が怖いなんておっしゃるんですか？」

思いのほか真剣な声で聞かれて、私は驚いてしまう。

いままで人に恋愛経験がないことを話すと、笑われるか、引かれるかのどちらかだったのだ。

「……えっと、それは……」

「すみません。私みたいな得体の知れない人間が聞いていいことはありませんよね」

「得体は知れます！ 霧島さんは、立派な作家さんです！」

つい大きな声を上げてしまい、恥ずかしくなつた私は顔を下に向ける。

「……その、怖いっていうのは……本気で恋をしてしまっていたら、きつと悲しい思いをしていた
だるうなって……それは、とても怖いなって思ったから……」

「なるほど、誰かを本気で好きになりかけたことがあるんですね」

「はい。昔、姉が付き合っていた人……に……」

途中で言葉を止めた私に、霧島さんは真剣な表情で尋ねた。

「なるほど、その人に、ずっと好意を抱いてるんですね」

「違います！ 付き合い始めたって聞いて、そんな気持ちは一切なくなりました！」

その人を好きになつたのは、もう八年も前のこと。当時高校生だった私は、大学生の姉がよく家

に連れてくるサークル仲間の人たちにかわいがってもらっていた。その人は、彼らの中のひとりだ。姉を交えた三人で遊ぶことが多くなり、彼を意識し始めた頃、姉と付き合いだしたことを聞いた。私の淡い想いは消えて、祝福の気持ちに変わったのだ。

「なるほど。しかし、付き合っていた、ということはもう別れているということですよ。彼がフリーになって、気持ちが再燃したんですね」

「違います！ ……そんな気持ちがあるどころか、彼が姉にしたことは許せません！」

「お姉さんは、その人にひどいことをされたんでしょうか？」

「はい。 ……彼は浮気をしていました。それ以来、私は恋愛にのめり込んでしまうのが怖くなりました」

「そんな人でなしの男と、お姉さんは別れて正解でした。それに、そんな奴にあなたが本気で恋をしなくてよかった」

少し強い口調で言われて、私ははっと気づく。

ついべらべらと、誰にも話したことのない話をしてしまった。

「すみません、立ち入ったことを聞いてしまって」

霧島さんが深く頭を下げてくる。

「 ……あつ、頭を上げてください！ 私こそ、すみません。情けない話をしてしまって！」

「私は情けないと思いませんし、聞かせてもらえてとても嬉しいですよ」

そう言つて、霧島さんはゆっくり頭を上げる。

彼はにやつと笑つて、ふたたび口を開いた。

「私は、その男に感謝しなければいけませんね」

反射的に「どうしてですか」と聞いたのを、私は後悔することになる。

「その男のせいであなたは恋愛に対して臆病になり、いままで誰とも恋愛してこなかったからです」

なんだか恥ずかしくて、両頬がかあつと熱くなる。

両親はずつと仲が良いし、幸せなお付き合いをしている友達もいる。

だから恋愛は辛いことばかりじゃないって知っているけれど ……どうしても悲しい結末を想像し怖気づいてしまう。

「俺は絶対に、榛名さんを裏切ったりしない」

顔を上げると、霧島さんが真剣な表情で私を見ていた。

彫りが深く、整った顔に思わず見惚れてしまう。優しい瞳に見つめられて、心臓がどくりと高鳴った。

「榛名さん、もう一度言わせてください。私と付き合ってくださいませんか？」

「 ……えつ、と ……」

「今日のようにデートをしたり、こんな風にご飯に行ったり、そういう男女のお付き合いをしてく

れませんか？」

胸の鼓動が速くなっていく。それと同時に、私の心には恐怖が満ちていった。たとえ小説のための偽物の関係とはいえ、恋愛だと思うだけで身がすくむ。

私は口を閉じ、テーブルの上に視線を落とす。

「そんな顔をしないで」

優しい声をかけられて顔を上げると、霧島さんがほほ笑みながらこちらを見ていた。

何か言わなければと思って口を開きかけた時、店員さんが料理の載ったお皿を運んでくる。

赤いトマトと白いモッツァレラチーズが交互に重ねられたカプレーゼ。

角切りの野菜がいっぱい入った、ミネストローネ。

チーズの上に生ハムとバジルが載った、薄い生地のローマ風ピザ。

ほかほかと湯気が立つ料理を前にして、私のお腹はぐううつと鳴ってしまった。

「とりあえず食べましょうか。私もお腹ぺこぺこなんで、足りなかつたらどんどん頼みましょうね」

そう言つて、霧島さんが料理をお皿に取り分けてくれる。

私は「はい」と小さく頷いて、それを受け取った。

霧島さんは「いただきます」と両手を合わせ、次々と料理を食べ進めていく。その気持ちのいい食べっぷりにつられて、私もどんどん口に運んだ。

彼がすすめてくれた料理はどれもおいしくて、あつという間に全て平らげてしまった。

「ここはデザートも絶品なんです。定番のティラミスもおいしいんですが、トルタ・カプレーゼとカンノーロもオススメです」

霧島さんはそう言つて、食後のデザートをみつつも注文する。

ほどなくして、それらがテーブルに並べられた。

おいしいデザートを堪能し、カフェラテを飲みながらほっと一息ついていると、霧島さんが突然こんなことを言いだす。

「実は私、書店に通いだしてから、ずっと榛名さんのことを見ていました。いつも笑顔で、書店で働くのが楽しくてたまらないって顔を……本が好きなことが伝わってきて、嬉しかったです」

思わぬ告白に驚いている私に構わず、彼は続けた。

「気持ち悪いことを言つてすみません。でも恋愛小説を書くなら、榛名さんみたいに本が好きで、大切にしてくれる女の子を主人公にしたいと思いました。担当編集者に誰かをモデルにした方がいいと言われた時も、真つ先に浮かんたのはあなただった」

まっすぐ見つめられて、私は何も言うことが出来ない。

彼の真剣な話しぶりと様子に、プロの作家としての熱量のようなものさえ感じられる。

中途半端な言葉では釣り合わない気がして、相槌すらも打てなかつた。

霧島さんは少し黙り込み、ふと目をそらしてから、また話し始める。

「今日は一日、私のわがままに付き合っていたいただき、ありがとうございます。帰りましようか」
そう言っただけ立ち、すたすたとレジに向かう。私が慌てて追いかけた時には、支払いが終わっていて、半分出すと言っても受け取ってもらえなかった。

レストランを出ると、夜の風が少し冷たく感じた。お店は大通りから脇道にちよつと入ったところにあるので、周りに人気はなくしんと静かだ。

さつき霧島さんに言われた言葉を、何度も頭の中で繰り返している。

彼は小説のモデルを探していて、たまたま知り合った私に声をかけたのだと思っていた。だけど、どうやらそうではないらしい。

書店で働く私をずっと知っていて、モデルにしたいと思ってくれたんだ……

そう思うと、途端に顔が熱くなってしまう。霧島さんに見られないようにうつむいていると、前を歩いていた彼がこちらを振り返った。

「お家までお送りしたいところですが、さすがに迷惑ですよ。ここでお別れにしましょうか」

霧島さんはそう言っただけ片手を差し出した。

「最後に、握手してもらってもいいですか？」

これが最後だからとでも言うように、少し悲しげな顔をしている。

……なんだろう。胸が痛くて苦しい。

急に心臓をきゅつと掴まれたような感じがして、私は思わず眉をひそめた。

「榛名さん？ 大丈夫ですか？」

霧島さんが心配そうに顔を覗き込んでくる。

私は胸の痛みをごまかすように、差し出された彼の手を両手でぎゅつと包んだ。

「榛名さん？」

握手とは少し違う握り方に、霧島さんが不思議そうな表情を浮かべている。恥ずかしくて目をそらしたい気持ちを抑えて、私はゆっくりと告げた。

「……私、大丈夫でした」

——次のお休みに私とデートして、大丈夫だと思ったら関係を結んでくれませんか？

四日前、喫茶店で霧島さんはそう言った。

——仮の恋人関係です。

霧島さんが望んでいるのは、本物の恋人関係ではない。

……何より霧島さんは、私の仕事に対する姿勢を評価してくれた。

それは私にとって、恋愛対象として評価されるよりも嬉しいことだった。

怖いと思う気持ちを抑えて、もう一度口を開く。

「……私で、よければ……仮の恋人にしてください……」

霧島さんが目を大きく見開いた。

「本当に、いいのか？」

いつもの丁寧な口調と違う。そんな彼にドキツとしながら、私は頷いた。霧島さんの顔がぱっと明るくなる。

「ありがとうございます。とても嬉しいです！」

彼はそう言って、いきなり私を抱きしめた。

「……霧島さんっ、あのっ、人に見られますから……」

胸の鼓動が激しくなり、バクバクと大きな音を立てている。私は彼の腕の中で慌てて身をよじった。

だけども、見た目よりも力強い腕にしっかりと包まれて、離してもらえない。

……お父さん以外の男性に抱きしめられるなんて、初めてだ。

恥ずかしくて、私は顔を隠すようにうつむく。

すると、霧島さんがくすつと笑う気配がした。

「ねえ、榛名さん。顔を上げてください」

そう言われて少し顔を上げると、すぐ近くに彼の整った顔があった。

……あ……男の人の顔だ。

まるで別人のように艶めいた表情に思わず見惚れていると、霧島さんの顔が近づいてきた。

彼の唇が、私の唇にそつと触れる。

ちゅつと音を立てて彼が離れていくのを、私は呆然と見つめた。

「恋人同士は、こうやってキスするんですよ」

低い声に耳元でささやかれ、自分が何をされたのかをようやく理解する。

心臓が大きく跳ねて、かああつと全身が熱くなった。

「もしかして、キスは初めてじゃなかった？」

「……っ！ 初めてに、決まってるでしょう！」

慌てて言うと、またちゅつと唇にキスされた。

「よかった」

彼が嬉しそうに笑う。恥ずかしくて、私はサツとうつぶいた。

長い腕にぎゅうつと抱きしめられ、耳元でささやかれる。

「あかり、かわいい」

心臓がばくばくしすぎて、胸が苦しい。

……名前前で呼ばれるのが、こんなにドキドキするものだなんて。

こんなの初めてで、恥ずかしい。なのに……

「こういうのは、怖くて嫌？」

霧島さんが私を気遣うように、優しい声で言う。私は彼の胸に顔をうずめたまま、小さい声で恐る恐る答えた。

「……怖くはない……です。たぶん……霧島さん、だから」

今日一日、彼がずっと細やかに気を配ってくれていたのを知っている。

私の歩調に合わせてゆっくり歩いてくれたり、勢いで失礼なことを口走ってしまう私に嫌な顔ひとつせず、丁寧な話を聞いてくれたりした。

今日だけじゃない。デートの行き先に植物園を選んでくれたのは、私が売り場で蝶々の凶鑑を見ながらぶつぶつ言っていたのを聞いたからだろう。

四日前、仕事終わりに喫茶店で会った時も、彼がドーナツをすすめてくれたおかげで緊張がほぐれた。

……家族や友達以外に、こんな風に大切にしてもらったのは初めてだった。

「じゃあ、もっと大切にしよう」

くすつと笑いながら、彼が言う。

また考えていることが口から出てしまったと気づき、私は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。大きな手で顎をすくわれ、顔を上向かされる。

「もし、同じように接してもらえらるなら、俺以外の男とも付き合うの？」

「な……に言ってるんですか。……私は、そんなこと……」

丁寧だった口調がいつの間にかくだけていることに気づき、なぜか胸が高鳴ってしまう。

彼に真剣な目で見つめられて、どうしようもなく胸が苦しくなった。

……なのに、怖いとは思わない。

「俺以外とは、こういうことしないって約束して？」

彼の声は優しい。だけど、逆らいたいがたい力があつた。

「……約束、します」

そう答えるやいなや、また唇をふさがれた。

角度を変えて、何度もキスを落とされる。

「……んっ……」

息を上手く吸えなくて、口から声がもれてしまった。

心臓が壊れそうなくらい大きな音を立てている。

頭がふわふわしてきた時、唇に生温かく湿った彼の舌が触れた。

「……っ！……きりしまさっ……っ！」

その感触に驚いて、つい大きな声を上げてしまう。

彼の胸を軽く押すと、やっと離してもらえた。強いお酒を呑んだあとみたいに、頭がくらくらしている。

「ごめん。止められなくて……。もう、俺のこと嫌いになった？」

顔を覗き込まれ、小さな声で答える。

「……嫌い、には……なってないですけど……恥ずかしいです……」

霧島さんはほっとしたように笑って、また私を優しく抱きしめた。

「次からはもっとセーブするから、もう少しだけこのままでもいいさせて」
低くて柔らかい声が耳に響く。

こうして抱きしめられることは恥ずかしい。……でも、不思議と怖くないし、嫌でもない。
彼の胸にそっと顔を預けると、ユキオと一緒に寝ていた時のような心地よさを感じた。

*

霧島さんと偽の恋人関係になってから、早一ヶ月。私の生活は大きく変わった。

書店の仕事はシフト制で、平日が休みのことが多い。いままで休みの過ごし方と言えば、たまつた家事をまとめて片づけ、あとは本を読むか、実家に顔を出さずらいだった。

仕事がある日はまっすぐ家に帰るだけで、そのあとはたまに女友達と電話する程度。

……なのに、霧島さんとは女友達や家族よりもまめに連絡をとって、一緒に過ごしてる。

平日は毎晩、メールで短いやり取りを交わし、私の休日には一緒に出かけるのが最近の習慣だ。
デートの前日には実家に寄り、姉に服を選んでもらっている。

五月末のある日、例のごとく私は休日を霧島さんと過ごしていた。今日は、初めてデートした植
物園に花菖蒲はなしょうぶを見に来たのだ。

紫のグラデーションが美しい花畑を見ながら、花の色や形で区別すると約五千種類あるという霧
島さんのうんちくを聞く。そのあとは、この間と同じように外でお昼ご飯を食べた。

帰り道、バスに揺られながら、ここ一ヶ月のことを振り返る。そして仮のお付き合いを始めてか
ら全ての休日を、彼と過ごしていることに気がついた。

それとともに、私の頭にある疑問が浮かんでくる。

「……霧島さん、その……私と会っていて、お仕事に支障はないんですか？」

霧島さんはいつも私に行きたいところを聞いて、下調べをしたり、プランを提案したりしてく
れる。

今日も、そろそろ今年の花菖蒲はなしょうぶが見頃だからと教えてくれた。

彼に連れられて、私の好きな絵本作家さんの個展や、彼の好きな現代美術館、アートアクアリウ
ムなどにも行った。

もともと出精でがしやうで、人混みや騒がしいところが苦手な私に合わせてか、人が少なくて静かな場所
ばかりだ。平日だからということもあるだろうけれど、それ以上に、きつと霧島さんが気を遣って
選んでくれているのだろう。

そう思うととても嬉しくて、くすぐったいような気持ちになる。同時に、霧島さんの執筆時間を
奪ってしまったような気がして、申し訳なくなるのだ。

「心配いりませんよ。執筆のほうは、あなたと会っているから絶好調です。とてもいい作品になる